

Vol.2
1992 SPRING

tlssd



ふるさとの街・探訪記

◆水と緑のアメニティタウン桑名市

面白WATCHING

◆江戸時代へタイムトリップ
ウォーキング東海道

歴史ドキュメント

◆明治改修による揖斐川導水堤と浚渫工事

TALK&TALK

◆デレーケと薩摩堤

民話の小箱

◆七里の渡しに咲いた千姫口マン

ふ る さ と の 街 ・ 探 訪 記



揖斐川河口からみた桑名市

※導水堤…漂砂による河口閉塞を防止し、河川の水を海に導くために造る堤防。

「桑名の殿様時雨で茶々漬」の民謡でも知られるように、蛤は古くから桑名の名産。300年以上の伝統を誇る産業です。蛤は真水と塩水の合流地点で採れるものが最もよいとされていますが、木曾三川河口でとれる桑名蛤はこの条件にピッタリ。赤須賀漁港からは、早朝、白波をきつて約二百船がいつせいに出海。伝統を支える漁師たちの心意気は今も健在です。この蛤は、殻が大きく肉が引き締まっているものほどおいしく、時雨に加工され全国へ出荷されています。一方揖斐川河口は白魚漁の中心地。その昔、俳人松尾芭蕉が訪れて、白魚の句を詠んだというエピソードはあまりに有名です。

川とともに息づく伝統産業

木曾三川の河口に位置する桑名市は、長い歴史と文化を伝える水郷の街。地名はすでに『日本書記』に登場しますが、江戸時代、東海道五十三次の要衝となり、城下町、宿場町、湊町として栄えました。現在、桑名市の人口は約10万人『快適で活力ある水と緑の文化のまち』を目指して、フレッシュな活動を展開しています。

新生桑名へ導いた 明治改修と城南干拓工事

伊勢湾北岸、木曾三川の下流に位置するこの一帯は、古来よりしばしば洪水に悩まされ、一方では市内を流れる町屋川、大田田川などが氾濫し、幾多の苦難をなめています。そうした水害から暮らしを守ろうと、明治政府に三川改修を強く要請しました。そこで政府は、三川分流を目的とした改修計画を立て、明治20年度から44年度まで明治改修を実施。ついに三川分流が実現しています。

一方、桑名・揖斐川沿いの海面に新築された導水堤により、城南地区に干拓事業が計画されたが、本格的に開始されたのは第二次世界大戦後で国内の食料不足を解消するため昭和21年から事業が実施され、緑豊かな城南干拓地が誕生しました。その後昭和38年、名四国道（R23）が開通、さらに現在、伊勢湾岸道が計画中であり、城南地区の今後の発展が期待されます。

『ふるさと桑名』づくりをリードする ビッグプロジェクト『東海道沿道修景整備事業』

その昔『十楽の津』と呼ばれた桑名は、交通の要衝として賑った町。江戸時代に入ると東海道五十三次の宿場町として、その名は全国に知れ渡るようになりました。特に尾張熱田の宮から海上七里を結ぶ七里の渡しは東海道の重要なランドマークでした。

東海道沿道修景事業では、旧東海道を創造的に再現し、美しい姿で後世に伝え、人々が歴史に親しみながら散策できる散歩道などを整備しています。沿道の石畳舗装、雰囲気のある史跡案内図や街路灯の設置、レトロ調の橋の修景など、七里の渡しから博物館までデザインされた旧街道は、情緒たっぷり。また、桑名城跡の九華公園の一部として『吉之丸コミュニティパーク』を整備。これと合わせて、建設省では、七里の渡し周辺の河川環境整備事業を進めています。揖斐・長良の雄大な河口を眺望するスペースはまさに絶景。憩いのスペースとして親しまれています。

※十楽は仏教用語で極楽を意味する。津は港のこと。

水と緑のアーメンティタウン・桑名市

桑名の礎を築いた、 名君・本多忠勝

関ヶ原の戦いの翌年、徳川四天王の一人、本多忠勝が桑名十二万石の城主になりました。城下町桑名を目指す忠勝は、天守・三之丸を築き、堀りをめぐらし、桑名に初めて近世城郭を築いたのです。海に面し扇状に開いた城は、別名『扇城』とも呼ばれ、『海道の名城』とまで讃えられました。

さらに忠勝は、町中へ三洲に分かれ流れ込んでいた町屋川をせき止めて、現在の流路に変え、湊町・宿場町・城下町として、雄大な都市計画を実現しています。

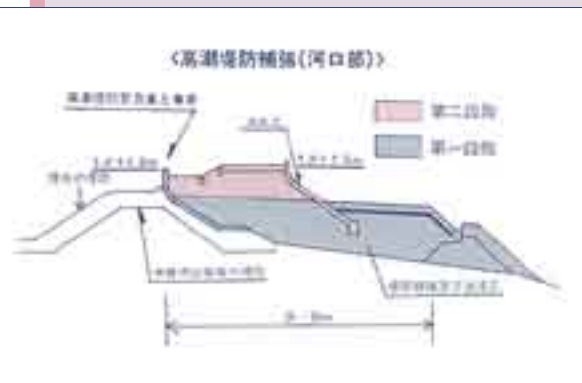
一方、産業育成にも非常に力をいれ、鋳物師、瓦師、陶工などには、苗字帯刀を許して保護奨励したため、商工業は大いに発展。主要産業である鋳物が今日まで成長したのも、この保護政策が基になっています。



これからの治水事業

『高潮堤防嵩上事業』

昭和34年9月、伊勢湾台風により、木曾三川の河口部の堤防（高潮堤防）は大きな被害を受けました。この復旧事業は昭和37年に完成。その後地下水の汲み上げに起因する広域地盤沈下により高潮堤防は約1m、多いところでは2m以上も沈下しました。高潮堤防の補強は昭和44年度から着手。さらに昭和50年度からは、緊急対策として波返工による力上げを実施し治水安全度の向上を図りました。



この高潮堤防緊急嵩上事業は同63年度に竣工。しかし波返工はあくまで、緊急対策。本格的な高潮堤防の補強はこれからが本番です。この事業は膨大な工費や年月を要しますが、建設省では、一日も早い完成を目指して、取り組んでいます。



住吉浦

江戸時代ヘタイルムトリップ ウォーキング東海道

大名行列や旅人がひっきりなしに行き交う東海道。七里の渡しから町屋川の常夜灯まで約一里の道中は、オモシロイ発見がありそうです。江戸時代の旅人のように、のんびりと、ウォーキング東海道。ノスタルジックでトラディショナルな旅気分を味わってみるのも素敵なアイデアです。

① 住吉浦

昔、このあたりは廻船の船溜り。航海の安全を祈って、住吉神社が建立されました。松林に二基の石灯籠は情緒たっぷり。水郷ならではの美しい景観です。

② 七里の渡し

掛斐川河口にあり、東海道五十三次の42番目の宿・桑名の玄関。尾張熱田の宮から海路七里を結び、伊勢路に入るための大鳥居『伊勢の国一の鳥居』が建っています。

③ 古之丸コミュニティパーク

桑名城跡・九華公園の一部。広さ9,000㎡のパーク内には、伊勢湾台風30年碑と高潮堤防力サ上げ事業竣工碑が建っています。

④ 青銅鳥居

春日神社前に立つ鳥居は、江戸時代、桑名藩主松平定重公が鋳物師辻内種次に建立させたもの。日本随一の青銅鳥居は桑名の名物として、昔の面影をとどめています。

⑤ 海蔵寺

宝暦治水で有名な薩摩義士の墓所のひとつ。総奉行平田鞆負は苦難を乗り越え工事を完成したが、犠牲者を出したことで自刃。鞆負をはじめ殉職者24名の墓があります。

⑥ 十念寺

本尊・阿弥陀如来、僧・行基による開基と伝えられています。境内には明治元年、戊辰の役によって自刃した森陳明の碑があります。

⑦ 長円寺

この寺の11代目の住職・魯編庵義道は、『桑名名勝誌』などの地誌を著すとともに、『千羽鶴折形』を刊行。この折形は桑名市の無形文化財に指定されています。

⑧ 安永常夜燈

常夜燈は東海道沿いにあり伊勢神宮へ折願するために建立されたもの。町屋川手前のこのあたりは、安永餅を売る茶屋や船遊び、筏で大変賑ったといわれています。



十念寺

『七里の渡し』が 手づくり郷土賞に。

手づくり郷土賞とは、建設省が地域の魅力づくりに貢献するさまざまなモニュメントや建物を表彰したもの。平成8年度は『七里の渡し』が素材部門で受賞。地場産業である鋳物製品を活用したアルミ互等による修景は、昔ながらの情緒を再現しています。



桑名市一年の祭り

1月3日・10日／新春かるた大会
2月3日／節分祭
3月14日／全国かるた競技大会
4月1日・16日／さくらまつり
4月1日・2日／桑名聖天大祭
4月29日／桑名は地球の真ん中
5月1日・15日／つつじまつり
(5月2日・3日はきんぎょまつり)
5月25日／薩摩義士祭典
6月／ミス桑名選考会
6月1日・15日／花菖蒲まつり
7月19日／石取祭ばやし優勝大会
7月25日／桑名水郷花火大会
8月1日・2日／石取祭・石取祭観光写真コンクール
8月中旬／桑名総踊り
10月4日／桑名ふるさとラリー
10月10日／鳥居まつり
10月17・18日／桑名の殿様御台所祭・千姫の折鶴祭
11月23日／七福神まつり

桑名を彩る季節の祭り

⑨ 桑名聖天大祭〈尾野山・大福田寺〉

—4月1日・2日—

桑名藩主松平定信公がご自身でお祈りになっていた聖天を預けて以来百数十年に及ぶ歴史があります。『火渡り神事』『稚児行列』『伊勢太神楽』など見物です。

⑩ 薩摩義士祭典〈海蔵寺〉

—5月25日—

宝暦治水で殉死した薩摩義士・平田鞆負ほか24名の霊を弔います。なお鞆負を祭神とする治水神社(海津町)では4月25日に祭典が催されます。



社(海津町)では4月25日に祭典が催されます。

⑪ 桑名城跡九華公園

さくらまつり(4月1日～4月16日)

つつじまつり(5月1日～5月15日)

花菖蒲まつり(6月1日～6月15日)

桑名城跡の本丸跡は九華公園と呼ばれ、桜、つつじ、花菖蒲が咲く頃には、お祭りを開催。憩いの場として親しまれています。



コラム「だからNO.1」

KISSO をご愛読の皆様へ。編集部から耳寄りなお知らせです。KISSO では、あなたのナンバーワンをお待ちしております。絵画、作文、俳句、工作など、川にまつわる作品ならなんでも結構です。どんどんご応募下さい。応募作品は厳正なる審査の上選考し、当選作品は KISSO 誌面に発表。と同時に、木曾川文庫にも展示させて頂きます。皆様の作品を、お待ちしております。

● 応募先 ●

船頭平開門管理事務所
木曾川文庫・KISSO編集部
〒496愛知県海部郡立田村福原
☎(0567)24-6233

春日神社青銅鳥居



長円寺



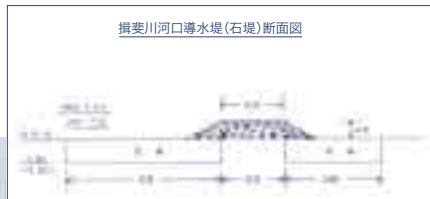
安永常夜燈



明治改修による揖斐川導水堤と浚渫工事

治水事業に夜明けを告げた明治改修。
船運が発達し、東海道五十三次の宿場街として栄えた桑名は、
明治改修により、水郷の街として再生。
揖斐川河口導水堤はこの地にやすらぎをもたらし、
船頭平閘門は、今も、川辺の名勝として人々が集う。
そこで今回は、桑名の治水の歴史を振り返ってみましょう。

揖斐川河口導水堤(石堤)断面図



明治改修のあらまし

戦国時代までは、木曾三川の流路は入り乱れ、幾度となく洪水を繰り返してきました。これらの水害に対応するため、様々な治水事業が行なわれましたが、江戸時代には、宝暦治水といつた大規模な治水事業が実施されました。薩摩藩士による宝暦治水は、木曾川と揖斐川を油島千本松原の堤によって分流しようとしたが、完全な分流には至らず洪水は減少しませんでした。明治政府は西欧の近代技術を導入し、抜本的な改

修、すなわち完全な三川分流計画を策定しました。
明治改修は三川の
中流以下、災害の最も激しい地域に限って計画され、その目的は、①洪水の除外②低水の改良・即ち堤内悪水の改善③船便を増進の3点。このうち①と②を重要とする計画は、三川分流を主眼とし、新川開削、築堤、制水工、導水堤等の改修工事を施工。さらに水源山地の砂防工事も行なわれました。

揖斐川筋の治水工事と船頭平閘門

桑名一帯の治水工事は、明治30年揖斐川河口部浚渫に始まり、築堤、制水工、導水堤を施工。明治31年には汰上・福島・小貝須など、新川となる部分の浚渫並びに築堤工事が行なわれました。揖斐川河口導水堤は河口水深維持の目的で明治39

42年度に浚渫土砂を利用して造成されています。小貝須地先新堤末端から全長約5、620mでその先端部分の約2、920mは石堤とし、導水堤の間には通船路が設けられています。

三川分流工事によって、青鷺、鰻江、油島喰違堤が、いずれも締切られることになりました。しかし船による輸送が発達した明治期において、木曾川上流域と桑名を結ぶルートは重要な水路。分流工事は、この最短ルートの確保を困難にしたのです。

そこで桑名の佐藤義一郎らが国会に閘門の設置を請願し、明治35年には船頭平閘門が完成。この閘門は、筏や船が行き交う小パンマ運河として、昭和前期までさかんに利用されました。

船頭平閘門

デレーケと薩摩堰



花園大学文学部教授
伊藤安男先生

建設省木曾川下流工事事務所には、デレーケ自身の手による数多くの図面が残されている。油島の喰違堰や猿尾などの実測図がみられる。宝暦治水工事の一環として築き立てられた羽島市石田の猿尾は、"Isida Saruo"として五百分の一の縮尺で測図されている。

これらはなにを意味するのだろうか。デレーケが油島にくるのは、始めての木曾川調査の一八七八(明治十一年二月二八

日のことである。薩摩藩士たちによる喰違堰に降り立ったデレーケはいかなる感慨に耽ったのであろうか。来日五年目にして始めてみる日本の伝統的な工法、いうならば日本人自身のオリジナルな土木技術に、日本新発見をしたのであろう。急流河川のない国の技術、オランダ工法に対する批判のなかで、日本の河川からなにかを学びとろうとする真摯な姿勢を見ることができ。そうであればこそ、大半が取り壊される堰を彼自身が測図したのであろう。デレーケは薩摩堰にほぼ魅せられたのか翌日に再び油島を点検している。

デレーケの木曾川改修にかける情熱は、油島にあつたかもしれない。彼が優れた技師であったことは、ともに来日した工師エッセルの故国の母親への書簡に次のように記している。

「：僕はデルフト王立アカデミー出身の技師たちよりも、デレーケのような人材を高く買っています。：デレーケと一緒に働ける好機に彼からたくさんのことを学びたいです：」

伊藤安男(いとうやすお)

花園大学文学部史学科教授。日本地理学会評議員、岐阜地理学会会長及び岐阜県郷土資料研究評議会会長。輪中研究にて岐阜県芸術文化奨励賞受賞。主なる著書『輪中』『長良川を歩く』『岐阜県地理あるき』など。
主なる論文「輪中の災害と治水」「輪中の水論」「蘭人技師デレーケと砂防」明治前期の治水思想」「木曾川改修工事とその前史」など。

浚渫船・木曾川丸の航跡

明治改修で忘れてはならないのが、浚渫船『木曾川丸』の活躍です。デレーケの献策によりオランダに発注された浚渫船は、喜望峰を経由してはるばる桑名まで回航され『木曾川丸』と命名されました。明治20〜30年度まで木曾川河口で、同31〜35年度、41〜43年度まで揖斐川河口で使用されましたが、当時の関係者は鉄鋼船の操作が不慣れだったため、一時は「厄介丸」と称される始末。しかし、河口低水路での浚渫で自己積載土砂ポンプ船としての威力を十分に発揮。明治43年には九頭竜川の治水工事にも転用され、日本海沿岸の浚渫工事に貢献するなど、昭和20年桑名市大空襲に遭遇し沈没するまで、日本の治水事業に華々しい航跡を残しています。



■平松礼二画

七里の渡しに咲いた千姫ロマン 三重県桑名市より

燃えさかる炎、炎上する天守閣…。栄華を極めた大阪城は、今まさに落城するばかり。赤い炎は夜空を焦がし、暗雲たる時代を染め上げていました。そんな時、一人の美しい姫君が助けられました。

名は千姫。二代將軍徳川秀忠の長女、そして家康の孫に生まれながら、時代の波にもて遊ばれるかのように、慶長8（1603）年、七歳で大阪城の豊臣秀頼へ嫁いだのです。

元和1（1615）年・大阪夏の陣、幸か不幸か危うく生命をとりとめた美しい千姫は、江戸城へ。失意を抱えて旅に出たのです。

気の遠くなるような道中。見るもの聞くものすべてが色褪せて、疲れきった

千姫は、桑名に立ち寄り、手厚いもてなしを受けました。桑名藩主本多忠政は、徳川四天王の一人忠勝の子で、妻の熊姫は千姫のいとこ。彼等の温かい歓待ぶりに、千姫は久し振りに笑顔を取り戻したのでした。

そして数日後、再び江戸城を目指して旅路についた千姫は、七里の渡しに向かいます。この時、御座船の指揮をとったのは、忠政の嫡男忠刻。武勇に優れ、円明流の奥義を授けられた忠刻は、美しい剣士。頬を撫でる風、光りが揺れる川面。熱田の宮に向かう御座船で、二人は恋に落ち、熱い心を通わせたのでした。

久方振りに江戸に戻った千姫は、「忠刻と結婚したい」と祖父家康に懇願したそう。やがて忠刻に結婚の下命がくだり、千姫は思い出深い七里の渡しを通り、桑名へ嫁いできたのです。

元和3（1617）年、本多家は加増され、姫路へ本拠を移すまで約10カ月。千姫と忠刻は桑名で幸せな日々を過ごしたとか。この間千姫は東照宮を桑名神社に勧請し、家康の木像を奉納しているそうです。しかし、その幸せもつかの間のこと。忠刻は若くして亡くなり、尼となった千姫は天樹院と称して、その冥福を祈り続けたと伝えられています。

※桑名市博物館では4月24日～5月31日まで『本多忠勝展』を開催。本多忠勝画像をはじめ千姫姿絵など、数多くの歴史資料が展示されています。



●木曽川文庫利用案内●



《開館時間》 午前9時～午後4時30分
《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》 無料

《交通機関》
国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曽川文庫
〒496 愛知県海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233

＝編＝集＝後＝記＝

木曽川文庫に船頭平閘門の模型が入りました。

この模型は、船頭平閘門の必要性や閘門の操作の仕組みをわかり易く説明しています。子供達の興味を引くことでしょう。

4月4日(土)から船頭平閘門桜まつりが催され、多くの人で賑わいます。つつじの季節もまたみものです。

KISSO No.2の編集にあたっては桑名市職員の方々に大変お世話になり、ありがとうございました。(NON)

(表紙写真 左：船頭平河川公園桜まつり
右上：桑名聖天大祭
右下：赤須賀漁港)